

症 例

上顎乳中切歯部の双生歯の1例

轟 朝 五 田 中 実 田 中 秀 穂

信州大学医学部解剖学第2教室

A CASE OF GEMINATION OF THE UPPER
DECIDUOUS CENTRAL INCISOR

Tomokazu TODOROKI, Minoru TANAKA and
Hideho TANAKA

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,
Shinshu University

TODOROKI, T., TANAKA, M. and TANAKA, H. *A case of gemination of the upper deciduous central incisor.* Shinshu Med. J., 27: 561-564, 1979

Four deciduous central incisors were found on the maxilla of a 5 years and 9 months old boy. On the right side of the maxilla, two deciduous central incisors appeared independently. On the left side, typical gemination of the deciduous central incisor was observed (Fig. 2). Because of serious caries, morphological features of the crown in these teeth were indistinct.

The X-ray film of the right independent deciduous central incisors demonstrated no abnormalities (Fig. 3). In the left geminate central deciduous incisor which had been extracted, the medio-distal diameter at the tooth neck was exceedingly large (Table 1). The labial and lingual surfaces of its tooth root were divided by a vertical groove (Fig. 4).

Follow-up examination of the patient at 9 years and 4 months of age, showed that the upper right permanent lateral incisor was small and peg-shaped. The upper and lower permanent first molars were slightly large in medio-distal diameter of the crown. The diameters of the crown in the other teeth were approximately normal (Table 2).

(Received for publication ; May 28, 1979)

Key words : 過剰歯 (supernumerary teeth)
乳中切歯 (deciduous central incisor)
上顎 (upper jaw)

I はじめに

藤田¹⁾(1973)によると、切歯部に出現する過剰歯は、代生歯群に比べると乳歯群においてはるかに少ない。乳歯群では、上顎の方が下顎より多少頻度が高いらしいが、正確な統計はないという。じっさい、乳歯列全体についての過剰歯に関する報告そのものが、

これまできわめて少なく、我が国において、10例内外にすぎない。杉山ら²⁾(1968)は小児歯科外来で抜去された過剰歯91例(106歯)中、20例(22歯)が乳歯列中に萌出した過剰歯であったことから、乳歯列期の過剰歯もかなり発見できるのではなからうかといっている。しかしその過剰歯自体が乳歯であるか、代生歯であるかということについては触れていない。岡本

ら³⁾(1964), 柄原⁴⁾(1956), 伊藤⁵⁾(1939)は乳歯列に萌出した代生過剰歯について報告している。吉岡⁶⁾(1959)は上顎乳側切歯の重複と思われる1例を, 萩原⁷⁾(1964)は上顎前歯部に出現した乳歯過剰歯の1例を, 埴原⁸⁾(1965)は上顎乳側切歯の過剰の1例を報告している。

いっぽう上顎中切歯と過剰歯との癒合, すなわち双生歯(Dentes geminati, Zwilling's Zähne)はかなりまれなものである。馬⁹⁾(1949), 住谷¹⁰⁾(1959)は, それぞれ795人と4050人の日本人青年男女について歯の異常を調査したが, 上顎中切歯の双生歯は1例もなかったと述べている。わが国では上顎中切歯の双生歯については, これまでに山崎¹¹⁾(1965)の18才の青年男子における両側性出現の報告があるにすぎない。

さらに, 乳歯の上顎中切歯における双生歯については, われわれが調べたところでは, わが国において伊藤⁵⁾(1939)以外にはいまだ報告がなされていない。外国においても現在までの調査では報告例は見当たらないようである。

われわれは, 上顎右側に過剰乳側切歯を有し, しかも上顎左側に乳中切歯の双生歯を有する珍しい症例を経験したので, その所見を報告しておきたい。

II 症 例

塚〇〇夫, 5才9ヶ月, 男, 松本市にて出生, 家族は両親と3才の弟が1人いる。そのいずれにも過剰歯は認められない。既往症としても特に記すことはない。体格, 栄養ともに良く, 健康で他に異常を認めない。

口腔内は不潔で軽度の歯肉炎がある。また齲蝕の進行が著しい。 $\overline{m_2}$, $\overline{m_2}$ は乳歯冠, $\overline{m_1}$ はインレー, $\overline{m_2 m_1}$, $\underline{m_2}$ はアマルガムが充填してあるが, 2次齲蝕を起こしている。 $\underline{m_1}$ は残根, $\underline{c | c m_2}$ は歯冠が崩壊されている。 $\underline{c i_2 | i_2 c}$ は軽度の齲蝕があり, $\overline{I_1 | I_1}$ は萌出の途中である(Fig. 1 A, B)。

上顎切歯部では右側に3本の乳切歯があり, 左側には乳中切歯の双生歯と乳側切歯がある。いずれにもかなりの齲蝕が認められる。右側2本の乳中切歯はそのいずれが過剰歯で, いずれが正常歯かを定め得ないので, 近心のものを $\underline{i_1}$, 遠心のものを $\underline{i_1^*}$ とする(Fig. 2)。歯冠の崩壊が著しいので, 歯頸部の大きさを計測するとTable 1の如くなる。日本人乳歯の歯冠の平均値(藤田¹²⁾, 埴原¹³⁻¹⁴⁾とくらべてみる

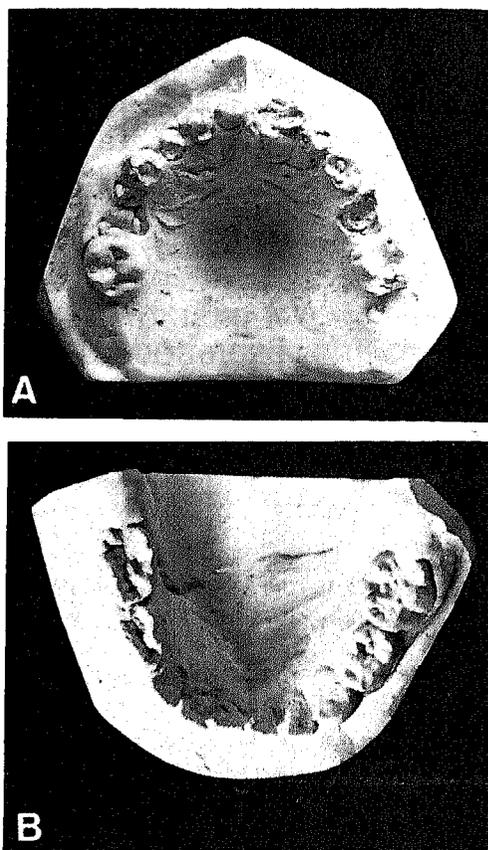


Fig. 1. General view of the dental arches.

A : Upper dental arch.

B : Lower dental arch.

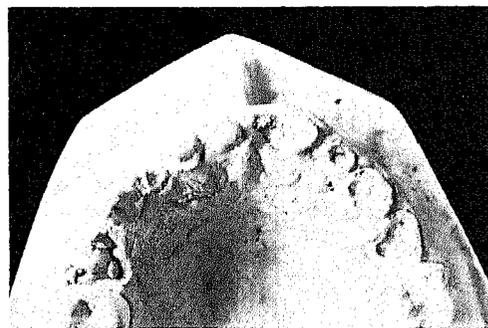


Fig. 2. Occlusal view of the upper dental arch.

と, 変異幅を考慮に入れても, なお左側の双生歯の歯頸部の近遠心径だけが, はるかに大きい。

上顎乳中切歯部の双生歯

Table 1. Diameters of the tooth crown and neck (mm).

		Right						Left				
		m ₂	m ₁	c	i ₂	i ₁ *	i ₁	i ₁	i ₂	c	m ₁	m ₂
Upper jaw	Medio-distal diameter			** 6.7	** 4.3	** 5.2	** 5.2	** 8.1	** 4.4	** 7.1		9.5
	Bucco-lingual diameter			** 5.8	** 4.8	** 5.4	** 4.8	** 5.2	** 4.7	** 6.0		10.3
Lower jaw	Medio-distal diameter	10.2	8.6	6.0	4.3				4.2	5.8	8.2	
	Bucco-lingual diameter	9.6	8.0	6.0	4.4				4.1	6.1	8.2	

** Diameters of the tooth neck.

上顎右側の2本の乳中切歯の歯冠の形態は、齧蝕による崩壊が著しいため不明である。したがって歯根の形態をX線写真像によって観察した。唇舌的投影像 (Fig. 3 A) についてみると、ほぼ正常であり、根尖に吸収がみられる。上顎左側の乳中切歯と過剰歯との癒合である双生歯、および乳側切歯は動揺が著しく抜去したので、抜去歯牙で観察した。この双生歯の歯根は唇側、舌側とも上下に走る溝により2分されている (Fig. 4)。X線所見によると、歯髄は歯根の中間部で単一化している (Fig. 3 B)。また $I_2 I_1 | I_1 I_2$ の形成途上の歯冠が見られる (Fig. 3 A, B)。

III 追跡調査

同一患者の9才4ヶ月における追跡調査ができたのであわせて報告する。

現存する萌出歯は、

$$\frac{M_1 m_2 P_1 c I_2 I_1}{M_1 P_2 P_1 c I_2 I_1} \Big| \frac{I_1 c P_1 m_2 M_1}{I_1 I_2 c P_1 m_2 M_1} \text{ で、}$$

X線所見では $\frac{M_2 P_2 C}{M_2 C} \Big| \frac{I_2 C P_2 M_2}{C P_2 M_2}$ の形成途上の

歯牙が見られる。 $\frac{M_1 P_1}{M_1} \Big| \frac{M_1}{M_1}$ にはすでに充填処置がほどこされているため、形態の細部は不明である。 I_2 は栓状歯である。 $I_1 | I_1$ は、大きさは正常であるが強度のシャベル型である。 P_1 に介在結節が存在し、酒井 (1969)¹⁵⁾ の分類で (廿) の部類に属する。歯冠の大きさを示すと Table 2 の如くである。藤田¹⁾、権田¹⁶⁾ の日本人の平均値と比較してみると I_2 の歯冠幅、歯冠厚はともに小さい。また $\frac{M_1}{M_1} \Big| \frac{M_1}{M_1}$ の歯冠幅はやや大きく、 $\frac{M_1}{M_1} \Big| \frac{M_1}{M_1}$ の歯冠厚もやや大きい。その他の歯においては差を認めなかった。

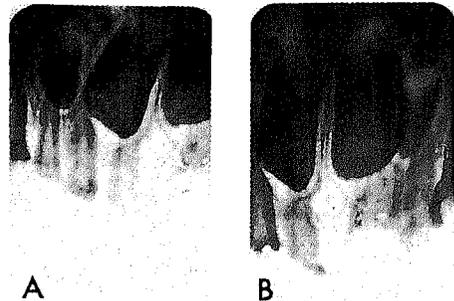


Fig. 3. Radiographs of the upper deciduous incisors.

A : Right side.
B : Left side.

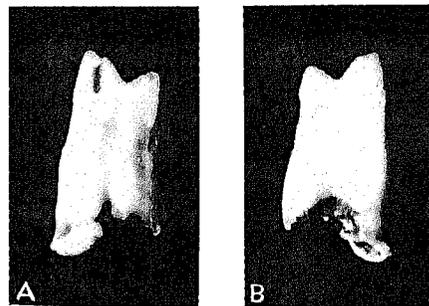


Fig. 4. Labial and lingual view of the upper left geminate deciduous incisor.

A : Labial view.
B : Lingual view.

Table 2. Diameters of the tooth crown (mm).

		Right					Left						
		M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁
Upper jaw	Medio-distal diameter	11.5		7.2		5.5	8.9	9.1			7.9		11.4
	Bucco-lingual diameter	11.2		8.9		4.4	5.6	6.5			9.7		11.3
Lower jaw	Medio-distal diameter	12.6	7.4	7.8		6.0	5.7	5.7	6.4		7.7		12.5
	Bucco-lingual diameter	12.0	9.7	7.3		6.4	6.0	6.2	6.0		8.4		11.4

Ⅳ まとめ

本例は5才9ヶ月の男子の上顎に、4本の乳中切歯が現れたもので、右側は独立した過剰歯であり、左側は双生歯である。いずれも齶蝕の進行が著しいため歯冠の形態は不明である。右側の独立した過剰歯のX線所見では、とくに異常を認めなかった。抜去された左側の双生歯では、歯頸部での近遠心径がきわめて大きく、歯根部は、唇側、舌側とも、上下に走る溝によって2分されている。そのX線所見では歯髄が歯根の中間部で単一化していた。

同一患者の9才4ヶ月の時の追跡調査によると、I₂が栓状歯で大きさが小さい。そのほかでは $\frac{M_1}{M_1}$ $\frac{M_1}{M_1}$ がやや大きい、それ以外にはとくに形態的な異常は認められなかった。

稿を終るにあたり、ご指導を賜った当教室の故鈴木誠教授、酒井琢朗教授(現 愛知学院大学)、志水義房教授、半田康延助教授に深謝するとともに、西沢寿晃助手のご助力に対し厚くお礼申しあげる。

文 献

- 1) 藤田恒太郎：歯の解剖学。第19版，p.186，金原出版，東京，京都，1973
- 2) 杉山乗也，伊藤 明，長繩弘康，西岡喜嗣，桑原未代子，黒須一夫：上顎前歯部過剰歯に関する研究。小歯誌，6：118-126，1968
- 3) 岡本 治，小徳静夫，田本 淳，清水恒久，倉繁房吉，今井 悟，鈴田邦介，古賀 定，平田志郎，野島福治：上顎前歯部過剰歯410症例の分類観察(その3)，乳歯過剰歯24症例。歯科学報，64

: 375-378, 1964

- 4) 枘原 博：稀有なる乳歯過剰歯の1例，そして，夫れの長期観察。歯科学報，56：408-412，1956
- 5) 伊藤英夫：本邦人乳歯癒合歯に就て。歯学，32：147-166，1939
- 6) 吉岡敏雄，小林 茂：上顎前歯部に発生した過剰歯の2例について。歯界展望，16：117-119，1959
- 7) 荻原 泉：乳歯過剰歯の1例。歯科学報，64：1015-1017，1964
- 8) 埴原和郎：日本人及び日米混血児乳歯の研究。人類誌，63：168-185，1954
- 9) 馬 朝茂：日本人の歯における形態的及び数的異常の統計的観察。歯学，6：248-256，1949
- 10) 住谷 靖：日本人における歯の異常の統計的観察。人類誌，67：215-233，1959
- 11) 山崎 裕：上顎中切歯部の両側性双生歯の1例。解剖誌，40：88-91，1965
- 12) 埴原和郎：日本人及び日米混血児乳歯の研究。人類誌，64：63-82，1955
- 13) 埴原和郎：日本人及び日米混血児乳歯の研究。人類誌，64：95-116，1955
- 14) 埴原和郎：日本人及び日米混血児乳歯の研究。人類誌，65：67-87，1956-7
- 15) 酒井琢郎：アフガニスタンにおける Pashtum と Tajik の歯および口腔の形態学的分析。愛知学院大歯会誌。5：60-72，1969
- 16) 権田和良：歯の大きさの性差について。人類誌，67：151-163，1959

(54. 5. 28 受稿)